

# NETWORK

## ねっとわあく



●「ねっとわあく」創刊50号記念特集

戦後を知らないオトナたちと 50年後にオトナを生きる子どもたちに贈る証言集

# わたしは今日まで 生きてみました

2007.3.1.  
Vol.50

# 「なつとわあく」創刊50号記念特集

戦後を知らないオトナたちと 50年後にオトナを生きる子どもたちに贈る証言集



# わたしは今日まで 生きてみました

戦後の荒廃から高度成長へ そしてバブル経済崩壊

構造改革 グローバリズム 格差社会など……

さまざまな時代の変化のなかで

わたしたちが どのように生きてきたかを

男女共同参画の視点から 振り返ってみると……

**「ネットわあく」特集記事 50号の歩み**

おかげさまで 50号……これからも どうぞよろしく!

- 1号 S 57. 知事(山本敬三郎)と語る
- 2号 S 58. 婦人の将来像
- 3号 S 58. これからの家族を考える
- 4号 S 59. 成熟化社会の家族像
- 5号 S 59. 私たちの主婦論
- 6号 S 60. 変わりつつある男女の性別役割意識
- 7号 S 60. 女性の就労について
- 8号 S 61. 「婦人のための静岡県計画」策定終わる
- 9号 S 61. 新しい婦人とは
- 10号 S 62. 国際交流
- 11号 S 63. 男女共同参加型社会をめざして
- 12号 S 63. 男の自立・女の自立
- 13号 S 63. しなやかにはばたいて
- 14号 H 1. 女性の輪 ネットワーキング
- 15号 H 1. 学んでジャンプ 家庭から自分へ そして社会へ
- 16号 H 2. 明日につなぐ生き方・再考 女の生き方ウオッチング
- 17号 H 2. 知事巻頭インタビュー
- 18号 H 3. 今・夫婦で生きる 夫婦の関係を見つめ直してみませんか
- 19号 H 3. 結婚ってなに?
- 20号 H 3. 家族とともに(この号まで「女性のための情報誌」)
- 21号 H 4. 今、魅力ある女性とは・男性とは
- 22号 H 5. 夫婦別姓を考える
- 23号 H 5. 男と女のバランスシート～男女共同参画型社会をめざして～
- 24号 H 6. 男と女のバランスシート～男女共同参画型社会をめざして～
- 25号 H 6. 平成子育て談義
- 26号 H 7. 平成夫婦談義～二人で会話してますか?
- 27号 H 7. 自分らしく生きる
- 28号 H 8. 女と男の21世紀にむけて～変えるのは自分～
- 29号 H 8. 女と男何かへん!?
- 30号 H 9. みんなでエンパワーメント
- 31号 H 9. みつめ直そうパートナーシップ
- 32号 H 10. パートナーシップ 自分らしい生き方を目指して
- 33号 H 10. NPOを知ろう!
- 34号 H 11. 歩き始めたNPO
- 35号 H 11. 男女共同参画社会基本法入門
- 36号 H 12. 家族それぞれのかたち
- 37号 H 12. 自立「パラサイト・シングル」を考える
- 38号 H 13. 転機「転機」はチャンスですか?
- 39号 H 13. 静岡県男女共同参画推進条例
- 40号 H 14. 「男らしさ」のバリア～自分らしく～生きていますか
- 41号 H 14. 自分の生き方の中で介護とどう向き合っていきますか?
- 42号 H 15. インターネットでもう一つの世界が広がる
- 43号 H 15. あざれあ 10 周年特集
- 44号 H 16. 「子ども未来絵」それぞれが自分色に輝くために
- 45号 H 16. いまどきのシューカツ(就職活動)と女子学生
- 46号 H 17. 探訪・団塊の世代
- 47号 H 17. 生き方のカタチ
- 48号 H 18. 生き方のカタチPart. 2
- 49号 H 18. 彼と彼女のリアル
- 50号 H 19. わたしは今日まで生きてみました



- 鈴木佳子さん(元大学職員)
- 鍋倉伸子さん(NPO法人清水ネット代表理事)
- 野村諒子さん(NPO法人東部パレット代表理事)
- 増田さかへさん(増田助産院・助産師)
- 久保寅雄さん(トンボヤ社長)
- 杉田至朗さん(元・新聞記者)

これは 戦後を知らないオトナたち 戦後を忘れたオトナたち  
 そして 50年後にオトナを生きる子どもたちに伝えたい 市民生活の歴史のひとつまで

## ■鈴木佳子さん(元大学職員)

# 望む道が いま開けつつある そこでどう語り どう行動するか

して、一番確実な道を確認するためのものだったのです。

## 差別は 日常茶飯事的？

わたしたちの世代の生活では、男女差別のようなものが、いわば日常茶飯事だったと思います。ただし、わたしが育った家庭はそうじゃなかったのです。

父は科学をやる人間で、母はごく普通の専業主婦でした。けれども、女の子だからこうしなさいというような言葉を、親からは、かけられたことがないんですよ。

また当時としては、珍しい核家族でしたから、祖父母は遠くにおりまして、あまり影響はなかったという感じですが、そういう家庭環境に育っていますので、当時の女の子としては、あまり男とか女とかを意識せず、どちらかかという男の子との遊びのほうが楽しかったんです。

むしろ親からは、人としてどう生きるべきか、という教育をされていたと思います。

ですから、職業も経済的に自立できるようにしなさいといふことで、大学進学になんかの抵抗もなく、職業を得る方法と

## 女子トイレが なかった

大学は、周りには男子学生がほとんどで、そこまで女子学生が少ないと、あまり意識されなくなるんです。

当時は、女子トイレすらありませんでした。ここ(浜松)の大学のキャンパスだって、女子トイレができたのは、男女共同参画社会基本法ができる頃です。それくらいではなかったかと記憶しています。

公共の場所、たとえば公衆トイレや駅のトイレは男女分かれていたかもしねませんが、決して多くなかったように記憶しています。

わたし自身は、そういうことをものともしないという感じでしたが、たぶんほかの女性で嫌だと思っている人は、たくさんいたと思います。けれども、それを言葉にして要求するほど女性はいなかったんです。大学にも、事務職員が少しいる程度でした。

## 産休

### 第二号です

卒業して就職すると、未婚の女性がたくさん働いていました。それで、結婚するとだいたい辞めるんですよ。ですから、ある程度の年齢になって働いているのは、結婚しないでいる女性や、戦争で夫をなくした女性など。職種は公務員などでした。

じつはわたし、静岡大学で産休をとった第一号なんです。そのころは、制度があっても、だれも使いませんでした。結婚後、頑張る人でも、子どもができたら辞めていましたね。また、産後休暇がたったの六週間でした。二カ月はなかったのです。

子どもが生まれると、午前と午後30分ずつ授乳時間というのが設けられていました。でも、子どもを職場に連れてくるわけにもいかないし、働きながらでは授乳は不可能に近いので、わたしは午前と午後の分を合わせて1時間朝遅く出勤したり、帰りを早くしたりしていました。

もちろんそれは、チームで仕事を進める職場ではできないことだったと思います。わたしは研究職でしたから、自



分ひとり仕事の結果を出せばいいわけ、だれかにマネジメントをされる立場ではなかったので、自由にやれていたのです。

ですから、他人からは、なんていう人間だと思われていたのかもしれないのですが、そのことで批判めいたことを言われた記憶は、なにもありません。

## 相手に理解して もうろう努力も

自分はやりたいけれどもできないという勇気のない人が、ねたましく思っ、足を引っ張るような行動をするのは、どこの世界にもある話じゃないですか。けれども、私の周りにはそういう人はいなくて、特に男性の人は、それはそれでいいだろうという感じで受け止めていました。

むしろ男性のほうが寛容ですね。そこでわたしが言い続けているのは、女性のライバルは女性ということ。女性は、やっかみやねたみが強く、訳のわからない足の引っ張り合いをしたがり、それに悩まされる女性が少なくない。

そういう点で、わたしはあまり嫌な

思いはしていません。しかし、なんでも  
そうですが、嫌な思いをする前に、自分  
がこうしたいと思っていることは、最  
大限相手に理解してもらおう努力を、ま  
ず自分からしなくてはならないし、相  
手がそれは駄目と言ったなら、あなた  
がそう思うのはなぜなのか、じゃあこ  
れではどうなのかと、いつも提案をし  
ていく必要がある。とくに男女に関わ  
る人間関係は、そうしていかないと、こ  
こかで無理をしたり、納得していない  
のに相手を屈服させたり、諦めさせたり。  
そうになると、絶対に自然には流れてい  
かないと思います。

### 望む道が 開けつつある

話は戻りますが、結婚したら辞める、  
子どもができたら辞める。やはりそれは、  
世の中に、そういうものを受け入れるシ

ステムがなかったからでしょう。

これは、だれが悪いとか、だれの理解  
がないとか、そういう個人の問題ではな  
いと思います。男性の理解がないから、  
女性の努力が足りないからなどと、言い  
争っていたら、話が進まないわけです。  
むしろそういう問題ではなく、世の中に、  
そういう問題を受け入れる基盤ができ  
てくれば、それが当たり前になるだろう  
と、何十年前前からわたしは思い続け  
てきました。

そのようなことを踏まえたらうえで、  
わたしが子育てをしたり、生きてきた  
中で思うことは、性別役割分業やそれ  
に基づいた差別が問題だといわれるけ  
れども、男女共同参画社会基本法のよ  
うなものができて、そこからなにか他  
の方法を見つけようと思えば、進むこ  
とのできる道筋が整ってきたというこ  
とです。かつては、しようと思わない人  
はいいけれど、しようと思う人もでき  
なかつたわけですから、そういう意味

でわたしは、国や県レベルでの法的整  
備というのは、なるべくしてなったあ  
りかただと思っています。

たとえば、遠くに転勤になる既婚の女  
性が、単身赴任を選択するとなったとき  
家事とか夫や子どもの世話など、いつた  
い誰がするのかなどということは、おお  
げさに言うことはない、それが普通であ  
る雰囲気ができつつあるじゃないです  
か。これは、すごいことだと思えます。わ  
たしたち世代の人間が、こうであったら  
いいなと思ってきたことが、社会のスタ  
ンダードになるうとしていく。

### どう語り

### どう行動するか

そうすると、いずれそう遠くない時期  
に、それが普通の世の中になるかもしれ  
ません。

では、仮にそうだったとして、世の中

はどうなるかという、表向きの暮ら  
しのありかたは、そうそう変わらない  
のではないかと思います。ただ、それを  
支える気持ちや、かなり変わってくる  
のではないのでしょうか。

それで、なぜ男女共同参画社会基本  
法ができたかという、やはり働く人  
たちの賃金格差が、最大の引き金では  
なかったかという気がしています。つ  
まり、条例に掲げられている性差役割  
分担がうんぬんということとは、人とし  
ての価値を同等に評価してほしいとい  
う女性の切なる願いが、一番の発端で  
はないのか。

そういう意味で、世の中の仕組みを  
よいものにしていくことは、男女共同  
参画社会の条例を受け止める女性たち  
が、いままでの習慣とか成り行きに流  
されずに、日々の暮らしの中で自分が  
こうありたいと思うことを、気負わず  
どう自然に語り、どう行動していくか  
にかかっているような気がします。

## ■鍋倉伸子さん(NPO法人清水ネット代表理事) 流されつつ生きてようやく気づいた 「行動しなければ何も始まらない」

始めは主體的でも  
意思的でもなく

いま振り返ってみると、わたしは長  
いこと、状況に流されつつ、主體的でも  
なく意思的でもなく生きてきたんだな  
あと、しつこく思います(笑)。

わたしも、団塊の世代のひとり、大  
学を卒業するころ、一般企業では大卒女  
子の採用は皆無に近く、女性の就職口と  
しては、教員か公務員しかないような時



代でした。

特に将来のことなど考えもせずに進  
学したのは、大学に入れば、生きること  
の意味を教えてもらえるだろうと...

もつともその期待は、ただちに見事に裏切られましたけれど(笑)。

でも、いわゆる孟母(もうぼ)ではなく猛母(まうぼ)のような母に育てられた一人娘のわたしは、たとえば「お行儀よく」「指示通りに」といったことを言われつつけてきたので、大学生になって、親の支配から解放されたことは、なによりうれしく思ったものでした(笑)。

ですからそのころのわたしは、生きにくいと感じることは多々あったのですが、その原因を観念的にとらえようとしていました。原因の一つがジエンダーであるとは、考えませんでした。ウーマンリブの運動も、自分に引きつけて考えませんでした。

## 身近な問題に 敏感な女性たち

結婚して、東京の多摩ニュータウンに住み始めました。

団地内には、学校・病院・商店・郵便局その他すべてがそろっていて、団地から出なくても生活が事足りてしまい、平日の昼間は女・子どもばかり。いま思えば、特殊なまちでしたね。

そのころのわたしの楽しみといえば、年に一、二回、買い物と称してひとり、新宿まで出かけ、ついでに美術館を訪ねたりすることだけ。

どこへ行くにも子連れで、自分の生活を楽しむために子どもを人に預けるなんて、やましいことだと感じていた時代、それが不満だったわけではなく、当たり

前だと思っていました。

もうひとつ、多摩ニュータウンで経験したことは、市民運動でした。70年代後半には、自治会長を選挙で選んでいました。そのとき選ばれた会長は女性でした。男性たちは仕事人間で、不在がちだったからでしょうね。

また、そのころ、団地住民の間で大きな問題になった電力会社の鉄塔建設反対運動も、専業主婦であるふつうの女性たちが中心となっていました。高圧電線の鉄塔が倒れたらどうする? 電磁波の心配は? というように、女性たちは身近な問題にとっても敏感でした。しかしその反対運動も裁判で敗訴してしまい、このとき大企業には勝てないものなのだというむなしさを実感しました。

## フランスも日本も 同時期なのに

さて81年に静岡に戻ってみると、自治会長は地域の顔役の男性がなるもので、選挙で選ぶものではなかった。これは、カルチャーショックでした(笑)。

母の知り合いに誘われ、大学婦人協会静岡支部の総会に参加。会員のひとり、海老坂武さんの「シングルライフ」についてのスピーチをしたことが印象的でした。

この会の活動に参加することを通じて、個人の生きにくさを社会の問題として捉える面白さに目覚めていったような気がします。ジエンダーの視点で社会を読み解く新鮮さですね。しばらくして、海外研修に参加するこ

とになりました。「猛母」の影響からか、わたしは今でも大義名分がないと旅行に行けない性格ですが(笑)、県の事業なら理解してもらえそうだと、応募しました。あざれあで事前研修を受けて、フランス・デンマーク・ハンガリーの三カ国を三週間かけての研修旅行でした。

フランスでは、女性の権利局を訪問。そこで女性に対する暴力の問題(DV)を初めて知りました。担当者は、「社会的にする(問題が)表面に出てきた」と説明してくれましたが、その当時はまだピンとこなかったものです。

日本にも、女性に対する暴力は潜在的にありましたが、家庭内のもめ事や夫婦間の私的なこととして、社会問題として意識される時代ではなかった。

女性が参政権を得たのは、フランスも日本も同時期なのに、その後の歩みはずいぶん違っていました。日本でDVが社会問題として騒がれるようになったのは、ずつと後のことです。

そのときの報告書の文にわたしは「個と集団」というタイトルをつけました。個と集団の課題は、わたしの生きにくさのもう一つの原因であるという意味で、これからも考え続けることになりました。そうです。

## 声をあげて いくことの大切さ

海外研修を終えてしばらくしてから、大学婦人協会静岡支部長になりました。こうした活動を続けるうちに、結果

としてむなしさを感じることはあっても、市民が声をあげていくことの大切さがわかってきました。「まずやってみることの大切さ」を、このとき学んだような気がします。

支部長は、二期四年やりました。この間「交流会議」の常任委員にもなりました。リーダーのあり方を学びました。

そして、大学婦人協会支部長と交流会議常任委員の任期が終わったとき、これからは地元で根ざした活動をしようと考えました。清水市の元気がなかったのです。そんな矢先、偶然、市役所で鈴木明与さん(NPO法人ワック清水理事長)に出会ったのです。市民が自由に集い、交流できるオープンスペースを獲得しようというところで意気投合しました。市民がその時々に必要な課題解決のためにネットワークを組めるような、ヒエラルキーではないゆるやかな組織を目指しました。

移転した社会福祉協議会の建物内に、平成11年「オープンスペース清水ネット」が開設されました。机もいすも印刷機もすべて市が確保してくれた中古備品でした。

このとき、自ら行動しなければ何も始まらないことが、わかりました。その後、市民の意見をまちづくりを生かそうと、「市民フォーラム」を開催することになりました。それと、「清水ネット」のなかに男女共同参画プロジェクトと「自治基本プロジェクト」などを立ち上げ、先進自治体の自治基本条例を参考に、自分たちで試案づくりもやりました。

現在は、NPO法人清水ネットとして、静岡市清水市民活動センターの指定管理

者の活動が始まり、市民活動やネットワークの重要性をあらためて感じています。

### どんな社会を築くか

ここ数十年を振り返ってみれば、女性の抱える問題がしだいに社会化してき

ましたね。また、ほんとうに支援が必要  
な人にまで届いていないかもしれない  
けれど、ゆつくり浸透しつつあります。  
男女共同参画社会基本法ができて、  
法としての仕組みは整ってきました。  
男女共同参画という言葉も、あちこち  
で使われるようにはなりました。しかし、  
実態はどうでしょうか。相変わらず、仕  
事と家庭生活の両立は難しい。女性が

意思決定に参画するためには、またま  
だ多くの困難が立ちはだかっています。  
そしてわたしも含め、人はみな、ある  
べき形を唱えながらそれが実行できて  
いない。いわゆるダブルスタンダード  
ですね。  
このことに気付く、変えることが大事  
なのでしょうが、難しいですね。  
また、男女共同参画社会の実現は、目

標なのか、手段なのかということもあ  
ります。男女共同参画・ジェンダーの視  
点なしに社会を変えていくことはでき  
ないと思いますが、それだけで世の中  
がすべてうまくいくわけではありませ  
ん。ですから、どんな社会を築いていき  
たいかを明確にしながら、今後も、NP  
O法人清水ネットの活動を続けていき  
たいと考えています。

## ■野村諒子さん（NPO法人東部パレット代表理事）

# 25年の専業主婦生活の先にみつけた ボランティアの世界！

### 人との関わりを 求めて

二年ほど前のことです。わたしは以前  
から、この東部交流プラザを利用するひ  
とりでしたが、指定管理者制度の導入と  
いう時期にあたり、ここをより利用しや  
すくするには、どうしたらいいかと考え  
る機会がありました。

その結果、わたしたち利用者自身が協  
力して法人をつくってやらせていただ  
こうということになったのです。  
そこで「静岡県東部パレット市民活動  
ネットワーク」というNPOを立ち上げ、

理事と事務局長をやらせていただくこ  
とになりました。

### 施設で障害幼児教育 などを学ぶ

では、専業主婦だったわたしが、どう  
して、ここでこうしているのか。

大学2年に、心理学研究会に入った  
のがきっかけで、国文科から心理学科  
に転科。心理学は、人の行動を研究する  
学問ですが、わたし自身、人との関わり  
が嫌いではなかったため、心理学の講  
義はとてもおもしろくて、居眠りした

ことはありません。このとき勉強した  
ことは、いまでも生きていると思います。  
いま、精神障害者のバンドのマネージ  
ャーもやっていますが、人との関わりを  
持たたいという気持ちが続いているな  
と感じます。  
昭和50年、大学を卒業して施設に就職  
しました。幼児から老人までが対象の規  
模の大きな施設でした。そして、障害の  
ある幼児のクラスを担当することにな  
り、急ぎよ保育の資格をとったのです。  
そこでは、障害児と健常児との統合教育  
を全国に先駆けてやっていました。  
その施設の園長さんは、行動力のあ  
る立派な女性です。当時その施設は躍



進中で、その園長からとても影響を受け、  
多くのことを学びました。

その園長さんは、25歳の時、ある化粧  
品の販売店を経営し、何人かを雇用し  
ていました。そして数年後には、あるメ  
ーカの下請けの作業所を作りました。  
そこで、働く人の中に障害者がいたこ  
とから、授産所として法人化したのだ  
そうです。

また、そこで働く女性たちには小さい  
子どもがいて、その子たちの面倒を見る  
ために保育園もつくってしまっただけ  
です。そこからだんだん施設を増やしてい  
く時期に、わたしが就職したわけです。

## 結婚・出産 そして専業主婦

そうこうして三年間ほどが過ぎ、大きな仕事を任せられ必死でこなす毎日でした。

じつはわたし、高校3年生の時、腎臓を悪くして一カ月間入院したことがありました。このときの人の生死にかかわる体験から、その後大きな影響をうけていたのですが、そんな体が、あまりの忙しさに耐えられなくなってしまったのです。

そのいっぽう、周りからは結婚を勧められ、10回以上のお見合。じつはわたし自身の頭の中にも、25歳で結婚して3人の子どもを育てたいという理想のようなものがあつたので、迷うことなく退職し、結婚しました。

翌年妊娠したのですが、三カ月目からひと月入院。その後も慎重に暮す日々でした。二年後、第2子を八カ月で出産。未熟児のため、おっぱいを病院に運ぶ毎日が続け、ようやく退院しました。ところが、安全規格の付いたおしゃぶりをのどにつまらせて、その子は亡くなってしまいました。安全なはずのものがなぜ？何を信じればいいのか？という思いでいっぱいでした。

そんなとき、ある図書館でおしゃぶりの死亡事故のチラシを見たのです。それで消費者センターに電話し、メーカーさんとも話しました。メーカー側では、危険のないようにその後改良しています。わたしとしては、これ以上犠牲者を出し

たくないという一心でやりましたが、これが社会に声を上げる初めての経験になりました。

その後、2人の子をなんとか産み、3人の子育てをする専業主婦として20年あまりが過ぎたときのことです。46歳の知り合いの方が、3人の子どもを残して、がんでお亡くなりになったのです。同じ年齢のわたしは考えさせられました。ちよつとそんなとき、東京で精神対話士の講座があることを知り、どうしようか迷いましたが、いろいろ試算してみても、自分のためにお金を使ってもいいだろうと判断しました。

折しも末の子も自立する時期にきていましたので、思い切ってその講座に参加。講義に出てみると、全国各地から多くの方が参加していて、エネルギーをたくさんいただきました。

## ボランティアとして 「ともに生きる」

講義が終わると、勉強したことを何とか生かしたいという想いで、保健センターの精神保健ボランティアを始めました。そのうちに音楽バンドのマネージャーをやることになり、いまに続いているのです。

たくさん薬を飲みながらも、できる限りのことをがんばる人たち。そんな障害者といわれる人たちが、演奏して歌を歌って、すごく楽しいことを提供できる。健康者となにも変わらないじゃないかとコンサートを聴きに來てくださった

人が感じてくれたら、心のバリアが少し取れると思います。

とはいうものの、コンサートを開くとなると、多くの方の力をお借りすることになります。でも、いつもいつも借りてばかりではいられなくなります。それでそのうちに、相手の手助けもするようになったのです。

そうこうしていると顔が広がり、いろいろなことをわたし自身が学ばせていただくようになりました。初めは彼らのためにしてあげるという感じでしたが、じつはわたしのためになっていくのです。今では、「ともに生きている」という感覚です。

そんなボランティア同士のつながりがどんどん太くなった結果、二年前に東部地域交流プラザの指定管理者の施設長になったというわけです。つまり25年間専業主婦をしていたわたしが、今はフルタイムでこの仕事をしているのです。人生って何がおこるかかわからないという感じです。

## より人間らしく 豊かな日々を

専業主婦時代は、夫の転勤で引越しを繰り返しましたが、積極的に学校や地域の役員をしました。当時は、社会の中に空いた穴を埋めている人とか、家庭でもすぐ対応できる人がいるからこそ、家族は外で安心して働けると思っていましたから。

こんな経験からみても、市民活動は女

性にとっては入りやすいと思います。男性の場合、会社人間として何年も働いてきていると、感覚のズレが出るかもしれないませんが、人生85年時代となると、60歳でリタイアしてはもったいないですよね。人間はいくつになっても、何かできます。その場がこの地域交流プラザです。ここでは男だから、女だからとかではなく、障害者だから、健康者だからとかでもなく、自分のできることを生かして、無理をしないで頑張っている場所だと思えます。特別の狭い世界に閉じ込められるのではなく、だれでも利用できるこの場所を活用して、より人間らしく豊かな日々をもつていただければ、うれしいですね。

